

朝をひらく

「何か、僕に訊きたいことはありませんか？ 本当にもうまく質問することができたら、もう答えは要らないですよ」（近代批評家・小林秀雄）

問いのない学習はなんとも味気ない。講義を終えて質問を待つが、学生は下をむいている。せつかくの対話の機会なのに、しかし本人たちはそのことに気づいていない。でも、一人の手が拳がった。「先生、期末試験の範囲はどこまでですか？」。何かガックリする。

看護学校でデイベート（論理学）を教えて20年が経った。デイベートから学ぶことはいくら

質問力

永田 円了
真国寺住職



るあるが、私が一番力を入れてるのは、反対尋問（質問力）である。

振り返ってみるに、日本の教育で今まで質問の仕方を学んだことはあっただろうか。意見を述べることに、プレゼンテーションの技術を習得する機会はある。しかし、なぜか質問の仕方を学ぶ場がない。

そこで私のクラスでは、次のような方法で質問力をつける練習をする。一例として、「太郎

と花子の死体が床の上で発見された。死体の周りには、少々の水とガラスの破片が散らばっている。さあ、犯人を捜そう」。教師である私だけが犯人を知っている。学生諸君は、私に質問することで犯人を突きとめる、というワークシヨップである。

何を聞いてもいい、ただし質問は「はい」か「いいえ」で答えられるもののみとする。「死

体には流血はありませんか」「窓ガラスは壊されていませんか」など、まずは事実を発見していくプロセス、質問としては入門編である。刑事が聞き込みをするように、状況事実がだんだんそろってくる。しかし犯人逮捕にはほど遠い。

実はこの演習、たった一つの

質問で犯人を突きとめることができるという仕掛けがしてあるのである。その質問とは、「太郎と花子は人間ですか!」。答えは「いいえ」。この質問で今まで想像していた状況が一変する。太郎と花子が人間である、という先入観が壊される。犯人はネコであり、太郎と花子は金魚だった、という結末である。

このような強力な質問には推論が必須になる。ただ知らないことを聞くだけでは、真実にたどり着くことはできない。質問者は頭の中で自由な発想を阻む壁を乗り越えねばならない。

16世紀ごろまで人々は、太陽が地球の周りを回っていると考えていた。太陽の昇り沈みを見て、この天動説を疑うものは誰もいなかった。そこへ、コペルニクスが問いを発した。「地球は動いていないのですか?」。既成概念を崩すには質問力がある。

頭の中の壁を越える